



# 経営と健康

## 日本歴史上の地政学

講師 一龍斎貞花

本誌の特集に地政学が紹介された。

まず引用させていただくと、地政学という言葉を初めて用いたのが、スウェーデンの政治学者ルドルフ・チーレンで第一次世界大戦が終了した翌年のこと

「資源が不足したら生存圏を拡大しても問題ない。他国を侵略することは当然の権利」と考えていたという。

領土を拡大しようとしたヨーロッパ列強の戦略に合致した部分があり、第二次世界大戦まで研究されていたが、戦争が終ると侵略そのものが否定されるようになり、地政学が激減したと書かれていた。

地政学とは、地理学と政治学を合わせた用語で、国の地理的条件をもとに政治社会学、軍事的な影響を研究するもので、自国の利益を拡張するための方法として用いられ、これを日本の歴

史に当てはめると武田信玄がわかりやすい。

### 信玄の地政学

甲斐に20以上の金山・銅山があり、これらの利益によって相手に金を与えて戦いを回避し勝利していた。

金・銅を掘り尽くしそこで信濃へ進出、二十四将という優れた家臣がいたが、資源不足を補うためであった。更に上杉謙信の経済力の基である港を手に入れる足掛かりだった。謙信は水の出る春日山に城を築き、青芋が多く越後上布、京都で人気があり収益大。直江津の港から船で佐渡へ行き銀の大量産出。将軍足利義輝や夫人に銀千両を贈り関東管領となり、8千人で出陣も11万の軍勢となり、領土を広げる北条

の出城をつぶし小田原に封じ込め、義輝から火薬の調合法の文書を贈られ、鉄砲も持つ謙信は領土にこだわらなかつたので、関東の大名は領土を安泰してくれる謙信に従った。

当時の海上の航路は日本海が主で、エゾの最高級の昆布を手に入れ、船で越前から京都へ送るため越前の朝倉家と親交。大船で兵を送り能登半島東岸の七尾城を朝倉とはさみ討ちにして落城させ航路を確保し、更に琉球まで交易し利益を上げる。海から取れる塩を信玄に送ったというのが最初は高値で販売。

謙信が強かったのもこうした利益によって軍資金が潤沢であったからこそ。信玄が川中島へ進出も、甲斐―信濃―越後と直江津の港を狙った。甲州は海がなく駿府の今川との同盟

も海が目的。資源を求めたのです。

謙信は、家来がまとまらなかつた時嫌気がさし「やゝめた」と一時引退した。信玄存命中は二十四将一人として裏切らなかつた。人事管理面では信玄ははるかに優れている。

信長が七尾城を攻めたのも、能登東海岸の良港と直江津の港が目的だった。謙信の大勝で「信長は案外に弱かつた」と謙信の書状。

信長は朝倉を滅すや筆頭家老の柴田勝家を越前北の庄で北陸担当にしたのも、越後の上杉対策からでいかに重点を置いていたかがわかる。堺衆を味方にしたのも火薬の原料硝石の輸入港。家臣に多くの禄を与えるため領土を広げる必要があつた。

信長は、長く続いた戦国の世を統一して平和を大前提にしたが、秀吉は征

服欲であった。朝鮮出兵から更に唐からアジア席卷を考えたほど。

徳川家康が、信玄亡きのち、信濃―駿河―甲州を我物にせんとしたのも、西は秀吉がいるので、地理上岡崎、浜松から東に目を向けたのです。地図をみれば隣国で当然のことに違いないが、ただ隣国だからでなく地理に精通していなければ容易なことではない。

ヒットラーが、ポーランドやオーストリア、ロシアへの軍事侵略も矢張り侵略政策を正当化したとされている。

さかのぼればローマ帝国も、フランスのナポレオンのロシアにまで進攻も地政学という言葉はなかったが当てはまるう。

その後も、イギリス、フランス、オランダなど多くの国を植民地化した。

東京裁判の時イギリスは、「我が国が統治しているアジアの国を踏みじった行為は許すことが出来ない」植民地が攻められたと発言。

日本が、第二次大戦に侵略したというならば、いくつもの国を植民地にしたイギリス、フランス、オランダなど侵略じゃないのか。

イギリス人の中には、「イギリスは負

けたんだ」と、いう人がいます。

世界地図を見れば、イギリスの植民地だった東南アジアの多くの国が独立し領土を失ったからです。「日本のお陰で多くの国が属国から救われ独立できたんだ」という人もいます。

### 日本の大東亜共栄圏構想

戦前日本が、アジア侵略を正当化するために掲げた大東亜共栄圏構想。

教育運動家、出版事業家下中弥三郎が、大アジア主義者として先頭に立つて活動し、戦犯として公職追放されたが追放解除になり平凡社社長に復帰。

下中は、東京裁判で日本無罪を主張したインドのラダビノード・パール博士と親交を結び、パール博士と下中弥三郎を記念するパール下中記念館が、箱根町の丘の上に建てられています。

「東京裁判とパール判事」の講談を口演しているの、記念館を訪れたが保管状態が悪く裁判の時着ておられたパール判事の法服が黄ばんでいるので、かつて自民党の実力者に「なんとかありませんか」と申し入れをしたが、残念ながら手つかず。

世界連邦運動のリーダーが、世界平

和アピール7人会委員でもあった。統一して平和にという構想だったのだろうか。湯川秀樹博士の父小川琢治が京都帝国大で日本最初の地理学教室を開講。戦争地理学は歴史と地理両面からの研究とされる。戦後GHQに悪の論理として禁止されたが、数年で地政学者の教職、公職追放は解除された。

ロシアのプーチン大統領のウクライナ進攻も偉大なロシア復活、「帝王になりたい」そんな欲があるといわれている。

スウェーデン首相、外相を歴任した欧州外交界の大御所といわれるカール・ビルト氏は、「スウェーデンは中立の立場で、NATO加盟に慎重な態度だったが、ロシアの進攻によってNATO入りを見望む人が急増し、フィンランドと一緒に加盟申請をした。ウクライナ進攻が地政学上の目覚まし時計となり国民意識が一気に変わった」と。地政学を語っている。

イスラエルとパレスチナの問題は、イスラエル建国による領土問題に端を発していると思う。以前中東講演会に出席。この会に落語家の故三遊亭円窓さんも参加、講釈師と落語家が中東問題に興味を持つのも不思議でしょうが、石

油、宗教問題、エルサレムの嘆きの壁の話には興味津津でした。

化石燃料が云々されているが、ガソリンの高騰などもあり、まだまだ石油は重要。以前「ホルムズ海峡波高し」の講演もした、地図を書き私に判るなら一般人はもつと判るだろうという考えからでしたが、今思えば赤面のいたります。中東情勢から石油地政学も云々されている。

「資源を求め他国を侵略することは当然の権利」という考えは実に恐ろしい。食料難、物資難、征服欲による戦い。中国の二帯一路。北朝鮮は食料難からいつ暴発しないとも限らない。その一方で戦争武器販売益がある朝鮮戦争は、終結の調印が行われていないので戦時中そのままです。

20世紀初頭ドイツで広まった大陸系地政学。イギリス、アメリカを中心とする英米系地政学。

G20の議長国となるブラジルのルラ大統領は、リオデジャネイロで来年11月サミットを開くと表明。「地政学の問題がG20の議論を乗っ取ることがあってはならない」と語っている。

むつかしい地政学に講釈師が挑戦しおつてとご寛容下さい。